

新萬葉論への序説

(一)

「万葉集」の成立については清和天皇の貞観の頃すでに疑問になつていたらしく、文室有季が下間に答えた有名な歌が「古今集」に見えているが、宇多天皇の寛平五年に書かれた「新撰万葉集」(上巻)の序文にも「万葉集」について、「文句錯乱、非詩非賦、字对雑糅、難入難悟、所謂仰彌高、鑽彌堅者乎。然而有意者進、無智者退而已」とあり、内容も難解視されていたことがわかる。

しかし「仰彌高、鑽彌堅者乎」とあるから、難解ながら尊んでいたのであろう。あるいは難解なるがゆえにいよいよ尊んだのかもしれない。同じ序文の中にも見えるように当時「万葉集」は勅撰と信じられていたらしく、「古今集」の両序にもそうした見解が伝つてゐる。「古今集」の仮名序で貫之は人麿を「歌のひじり」とし、万葉時代を聖代として憧れているが、貫之に限らず当時宮廷にそうした機運が強く動いていたのであろう。難解疑問の書に深祕な力を感じながら新

しい文化創造をめざしてもがいていたのだ。学的にみれば滑稽な誤りを冒しながら、文化創造へとかりたてられる靈感において誤たぬものをうけとつていたとみられる。出来あがつたのは「万葉集」とは凡そ縁遠いものではあつたが、「古今集」には「古今集」としての意義が考えられる。

こうして「万葉集」は厄介ながら尊い古典として權威をもつていたと思われるが、「古今集」ができてからは次第に敬遠され、「古今集」が代つて新しい古典として力をもつようになる。「古今集」の方がより親しみ易く解しやすいため、「万葉集」はたゞ古風な歌言葉の出典として利用されるに至つた。一面には学的研究の対象とされ、書写校合が加えられるとともに古点次点等をへて訓話の作業も進められてゐるし、俊成や定家後鳥羽院なども相当に敬意を払つてゐるが、「古今集」をはじめ三代集の權威には及ぶべくもなかつた。内容においても距りが大きい上に、漢字ばかりでしかも特殊な用字法をもつて書かれた「万葉集」が敬遠されるのは自然の勢といえよう。

井 上 豊

併し中世になると事情が一変する。すでに將軍実朝が初頭に現れて万葉風の歌をよみ万葉調の發達に時期を劃した。為家なども、「万葉集のうたなどの中にこそうつくしかりぬべき事のなびやかにもくだして、よき詞わろき詞まじりて、きよくきをやさしくしなしたるもめづらしき風情にきこゆれ」(詠歌一体)、と、いろいろな言葉のこし万葉調の歌もよんでゐる。後世風の優美を本位とした立場であるが、これらの言葉と平安末期の六條派歌学や俊成定家また後鳥羽院等の万葉尊重などをおもいあわせると、「万葉集」への関心は当時一つの潮流をなしていたといつてよく、実朝の万葉調も既成歌壇におけるこうした潮流から脈をひいてゐることは否定しがたい。しかし万葉集は貴族文学とはいふながら、大伴氏等武門の旧族を背景として成立し、原始性や地方文学的性質にも富んでゐる。特に東歌や防人歌などを通して特殊な因縁をもつてゐるので、鎌倉幕府の樹立による関東武門勢力の據頭が「万葉集」への関心と興味を深めるのに相當に役だつたに相違ない。中世になつて勅撰和歌集に万葉の古歌をのせる率が急に高まつてゐるのも、そうした傾向を反映するものであろう。(勅撰集といつても撰者によつて態度が異なる。)実朝の万葉調は特異な性格と環境に促されて先端をきつたと見られる。実朝について仙覚がでて万葉学に時期を劃した。仙覚は若くして万葉研究に志し、特に東歌に力を入れてゐるのは東国に生れ東国に育つたためであらう。校勘については將軍

頼經の依頼によるところが、諸本披見につき便宜をも得てゐる。はじめ源親行が依頼をうけ校勘を進めたのであるが、見落しもあるといふので仙覚がひきついだもので、長流・契沖と水戸光圀との關係を思はせるところがある。鎌倉時代の末期に京極為兼が二條派に對抗して万葉風を強調した。實際の歌風は必ずしも万葉主義に終始したものではなく新古今風の影響も強いが、京都の歌壇にもこうした万葉主義的な傾向が現れ、玉葉風雅のような勅撰和歌集まで残すに至つた。為兼は実朝の歌風をたたえ、実朝の万葉調に呼応したあとが見える。為兼と対立した為世の言葉に、「日本紀万葉集の言どもよみて人もしらぬことしりたるよしするさま朝野にみちみちて云々」(和歌秘伝抄)、とあるから、万葉流布の情況もおもいやられる。具体的には主として京極派の歌風をさしたのであるが、定家や為家が「万葉集」にある程度の寛容を示してゐるのたいし、為世あたりになると為兼への對抗意識から極度に万葉風を敬遠するに至つた。が仙覚によつて訓詁註釈の仕事もかなり進められ、勅撰集にも多くとられたりしてゐるのであるから、一般への流布をむりに阻止しようとしたところでとうてい及ぶべくもなかつた。既成歌壇のゆきつまりや伝統意識の昂揚が万葉にたいする好尚を促したのであるが、前記のように関東武門勢力の據頭も直接間接に暗示と影響を与へたことと思はれる。

室町時代になり由阿が「詞林采葉抄」其他の註釈を残し、

宗祇等にも著書があるが、概して獨創性に乏しく、実朝のよ
うな天才歌人も現れず、仙覺のような学僧が研究に時期を劃
することもなく、為兼の歌論のような旗色鮮明な万葉主義も
みられない。たゞ連歌の流行につれ語句の典故として相当に
もてはやされたらしい。鎌倉時代にくらべずと低調になつ
たのは、生活の混乱、文化の中心が再び京都に傾きながら、
京都の文化も実力をもたぬといつた一般事情に災されたので
あるが、勅撰集が絶えたため刺戟を失つたせいでもあるであ
らう。いずれにしても鎌倉時代は作歌においても、研究におい
ても「万葉集」から強烈な個性を感じ取つてゐるが、室町時
代には散漫に平板になつた。

(二)

近世になると万葉研究も万葉風の作歌も飛躍をとげた。政
治が安定して文芸復興の機運が動いたためでもあるが、関東
の江戸幕府を中心とした武家政治の確立に負うところが多い
であらう。加えて平民の擡頭は「万葉集」の庶民性への親近
となつた。奈良朝は朝廷貴族を中心とし武門や地方豪族を従
とした文化であり、江戸幕府は、武士階級を中心とし公家や
町人を従とした。ともに典型化された中央集権政治であり、
漢学儒学を政治の基礎としている。たゞ前者は上方の山間に
栄え、後者は東国の海辺を中心としている。貴族政治と封
建政治といつたように根本的に異なる性格をもちながらも、共

通性も少からずみられるのであつて、「万葉集」にたいする
関心と興味が近世になつて急に高められたのも故なしとしな
い。近世における万葉研究のいとゞちは上方で下河辺長流の
ような風変りな浪人もや契沖のような物ずきな学僧の手に
よつて開かれたが、水戸光圀の激励と助力がなかつたならば
彼らの業績は民間に埋れてしまつたかもしれない。

こゝで仙覺が常陸の生れであつたことをも想起したい。中
期になつて遠江に賀茂真淵が現れたが、上方に學んで江戸に
出で、万葉研究に新生面を開くとともに万葉調の作歌を鼓吹
した。真淵以後は万葉研究も万葉調の歌人も全国的に広めら
れている。万葉調歌人は宗武あたりを例外とすれば、魚彦・
諸平・曙覽・良寛・元義等地方歌人が多く、「万葉集」の性
格をものがたる。

真淵は性格的にはロマンチストであるが、万葉の歌風と
しては「まこと」や「しらべ」を中心として自然と真実の美
を強調した。「ますらをぶり」をも説き力感と動性にたいす
る憧れも見える。性格を反映してロマンチックな傾向もいち
じるしく、特に「しらべ」を強調した点にそうした特色を見
せている。純一な美や典型性への憧れも強く、「万葉集」の
本質が浪漫自然の典型化にあるとするならば、そうした本質
は真淵によつて端的にとらえられてゐるといへよう。しかし
全体としては自然性の強調がきわだち、特殊な意味における
自然主義的偏向のあることは否みがない。万葉歌人に地方色

が勝つてゐるのは万葉集本来の性格を示すとともに、右のような事情に負うところも多いであらう。逆に契沖や御杖が深祕性を説いてゐるのも注意すべく、言靈思想や歌格の研究も進められ、近世の万葉研究は多彩なところがあつたが、根本思想としては自然主義をもつて貫かれていた。

(三)

明治になり子規は写生論の立場から「万葉集」をうけつた。鉄幹をはじめ万葉調を讚美したが、のち新古今趣味に傾き万葉調と浪漫主義とが結びつかずじまつたのは惜しい気がする。「於母影」の巻頭にも笠女郎の歌が掲げられたりしているのだが、万葉調はロマンチズムの方向において実を結ばず、写生論系統の万葉観が近代の歌壇を支配した。歌壇のみならず学界やジャーナリズムまで風靡した。

写生論も要するに短歌や俳句を中心とした写真主義であり自然主義であつて、写生主義の支配によつて「万葉集」のもつ浪漫性は無視されるに至つた。

「万葉集」のもつ自然性は浪漫自然として、浪漫性と結びつき、また典型化されて典型性と結びついているところに独自なものがあるのだが、近世以来自然主義や写真主義の立場が主となり浪漫性や典型性が軽視されている。特に浪漫性はほとんど無視された観がある。写生論をついだのはアララギ派の歌人であり、茂吉にはロマンチックな傾向が強く、歌論に

おいては実相観入をとりたりしてゐる。赤彦はとくに御杖の思想に注意して「万葉集」の深祕にふれ象徴性をといてゐるのは興味ぶかい。がこれらも写生論を根幹としての変容にすぎず「万葉集」のもつ高らかな浪漫性はまともにとりあげられていない。

けれども中世以来の古今主義にとつて代つて、近代における万葉主義の流行はまことに壯観であつた。近代日本の性格は半封建的な資本主義と絶対主義政權に支えられた社会構成や、王朝の伝統の再興とヨーロッパ自由主義との合流を基礎とした文化構成をもつて特徴づけられるが、悠久な伝統文化の興隆地方勢力の擡頭、大陸文化の流入、等を背景とする万葉時代と共通する点が多い。根本においては天平姿の朝臣とチヨツキを着けた紳士とで象徴されるような距りも考えられるが、意外な共通性をも備えているので、近代における万葉謳歌の風潮も故なしとしない。しかし大戦勃発とともに、「おほきみは神にしませば」「しこのみ楯といでたつわれは」というような歌をもつて「万葉集」の全体を代表せしめるようなことになつた。戦後は反動として同様な根拠から「万葉集」を全く否定しようとする傾向さえ見られた。「万葉集」の片鱗をもつて全体を推せうとするもので、どちらか正しいとはいえない。「万葉集」を全面的に見直そうではないか。自然主義的な迷路からひき返し、潮の高鳴りのような民族のコーラスに耳を傾けよう。靈感をはたらかせ深祕に思をひそ

めよう。万葉特有の清純な美と力を新時代の青春につなごう。古典から新しい文化創造への通路が開かれなくてはならぬ。

古典を現代的に把握せよというが、たゞ現代の既成觀念か

久松潜一・森本治吉・木俣修監修

萬葉集講座

全四巻

- 第一巻 解釋・鑑賞篇 二五〇圓
- 第二巻 藝術美篇 二四〇圓
- 第三巻 研究篇 近刊
- 第四巻 作家篇 二五〇圓

本講座の特色

- 一、必ずしも旧来の固定觀念に捉はれないで、今日の觀點に立ちながら、国民の古典としての万葉集の美しさを総合的に觀照したこと。
- 二、現行の教科書に採られてゐる万葉集の歌は全部取り上げて解釈及び鑑賞をほどこしたこと。
- 三、「枕詞総釈」「万葉歌言葉四百語新解」等を作成し短歌の実作者の便に資したこと。

東京都中央区日本橋小舟町二の四

創

元

社

振替東京一五六五

らの解釈に終るならば古典を現代的に殺すことにならう。現代は刻々に移る。むしろ文化創造の立場から古典を未來につなぎたい。未來的に生かしたい。それは必ずしも空想を事とするというのではなく、虚心に過去を顧ることでもある。

推薦の辭

佐佐木 信綱

言古りにたれど、万葉集は、日本文芸の華として、国の内外にその価値を認められること年久しい。さりながら、一千余年の歲月は、古への言葉を知り難くし、一首の意を臆ならしめて、専門家といへどもこれを解くこと必ずしもやさしいといひがたい。かゝるが故に、本講座の四巻のうち、二巻までを解釈と文学的鑑賞とに当てたことは、まことに賢明な講座の編み方といふべきである。のみならず、その内容を実際に読むに、説くところ多く最新の学説に基づき、新鮮の気分紙面に溢れている。世の人の万葉の理解は、これによつていやましに深まり、色とりどりの古歌の麗しさは、人々の胸にさはやかな花の香をよみがへらせて、匂ひ満つるにちがひない。

また更に思ふに、人の好みも時代と共にかはり、美しと見た姿も遷りゆくものゆゑ、万葉の味はひ方も、今の代には今の代の味解がうち樹てられてゐる。その味解とは如何なる姿を持つものか。本講座がそれに答へてくれる。ここに見る種々の万葉集の解剖は、万葉そのものを語ると共に、他面に、昭和の人々の見方を示すのである。「万葉」といふ鐘に写る今の世の人の心の姿を見るべく自分は多大の興味を拂ひつつ本講座の速かな完成を願ひ祈るものである。